

京都大学大学院 教育学研究科教授
楠見 孝

作文、読書感想文、卒業文集などを書くことが苦手な子どもも多いと思います。その理由は、第一に、これまでの学校の国語の授業では、課題は出しても、書き方を教えるための十分な時間を取っていないこと、第二に、書き方のコツを明示的に教えて、それが身につくように練習することが少ないと考えます。この講座の目的は、これまで学校ではあまり取り上げられていない、書く力を伸ばすことに焦点を当てて、さらにその土台となる思考力を育むことにあります。

子どもは、書き方のコツを身につけることによって、書くことが容易になり、作文などへの苦手意識がなくなります。さらに、書くことのコツを増やしていくことによって、小論文などの入試の記述問題、進学してからの小論文やレポート、社会人になってからの報告書や手紙など、生涯にわたって使っていくことができます。

もう一つ大切なことは、書くことは、国語だけではなくすべての教科にかかわる思考力を育てる上で最も重要な学習活動であるということです。

それは、第一に、書くためにはじっくり、さまざまな角度から考えることが求められます。たとえば、あるテーマについて調べて、考察して意見を述べたり、まとめる探究活動においては、(1)テーマを明確化してプランを立てること、(2)材料を整理してそれを分析・評価すること、(3)論理を組み立て、言語で表現することなどがあります。

第二に、自分の思考を言語で書き表すことによって、書いたものを自分でも読み込んで、一步離れた位置から客観的にチェックすることができます。一人、ペアやグループでお互いに読み合い、比較をしてその違いを考えることになります。さらに、書いたものをファイルなどに整理して残しておけば、自分の思考の成長を振り返ることができます。これらのことは、自分の思考を振り返るメタ認知能力を伸ばすことにつながります。

最近、アクティブラーニングとして学校で盛んに行われている話し合い活動は、一見活発であっても、その場限りの思いつきのやりとりで、深い思考がともなわない活動で終わってしまうことがあります。そうしたことがないように、この講座では、じっくり考えてから書いて、発表や話し合い活動をして、それを踏まえてさらに考えて書くことによって、子どもたちが考えることを促すことをめざしています。

本講座を通して、先生方が子どもたちの書く力とそれを支える考える力を育み、その子どもたちが未来の社会で活躍することを願っています。

目次

第1部第1章 「書くこと」はコミュニケーション	4
第1部第2章 文章の「基本」「型」「ルール」	14
第2部第1章 意見文の書き方のコツ	22
第2部第2章 報告文の目的とは	34

【授業を実施される先生方へ】

- 本マニュアルにおける各章の「2本時の構成」は、基本的には授業時間 45 分を想定した場合の授業展開の目安です。受講生の取り組み状況等に即して、適宜時間を調整してください。映像中のタイマーも同様に目安であり、必要に応じて延長したり、途中で切り上げたりと、柔軟にお使いください。
- 「受講生用テキスト」は、映像で解説する内容をほぼ網羅しています。ただし、学習効果を高めるため、授業時は基本的に映像視聴に集中させるようにしてください（復習や欠席者へのフォロー等にご活用ください）。
- 本学習プログラムでは、話し合いや発表といった協働的な活動をワークに組み込んでいます。「映像視聴時とグループワーク時は席配置を変える」「椅子や体を相手の方向に向けて話させる」など、活発な活動を促す指示をしてください。
- 本プログラムでは、テキストに書き込むワークにも取り組みます。提出・添削等は必須としていませんが、必要に応じて「テキストを回収し控えを取る」「別紙に書かせる」などにより、受講生の達成度をご確認ください。

「書くこと」は コミュニケーション

(テキスト6~15ページ)

○ 本講座「書く力」のねらい

- 「記述」や「作文」に対する抵抗感を取り除き、自分の考えを豊かに表現する意欲を引き出す

今回の4回講座「書く力」の最大のねらいは、入試のみならず社会生活でも必要不可欠な「書くこと」の学習体験を受講生に提供することで、「記述」や「作文」に対する抵抗感を取り除き、自分の考えを豊かに表現する意欲を引き出すことである。本講座には、受講生の「書くこと」に対する肯定的な姿勢を育んでいくようなトレーニングが多く組み込まれている。本講座が期待する指導者像は、先生から押しつけられる受け身的な課題としての「書くこと」から、自分の考えを誰かに伝えるために「書くこと」に積極的に取り組むようになるきっかけを作るサポーターである。

● 試験問題の解答としての「書くこと」

ただ中には、既に「書くこと」に対して大きな喜びを感じ、自信に満ち溢れている受講生も存在することだろう。そうした受講生に対しては、その受講生の個性を尊重しつつも、試験問題として「書くこと」が求められたときにどのように取り組めばよいかアドバイスしていただきたい。

例えば、「昔とイメージが変わった経験」について書かせる問題があったとする。このとき、「イメージすることの大切さ」についてどれほど豊か

な表現が用いられていたり、独自性の高い「イメージと違った経験」が書かれていたりしたとしても、以前抱いていたイメージがどう変化したかの前後の違いが明確に示されていないと高得点にはならない。角度を求めなくてはいけないのに、長さを答えに書いてしまったら間違いとなる算数の問題と同じだということを理解できると、本来持っている記述力と点数が噛み合わないという事態を減らせるようになる。

● 受け持つ受講生と担当する指導者の個性を生かす

受け持つ受講生の「書くこと」に対する姿勢や能力を見つつ、マクロな視点で「書くこと」に対する前向きな姿勢を引き出していくことに力を入れるか。それともミクロな視点で書く能力に磨きをかけていくことに力を注いでいくか。受け持つ受講生と担当する指導者の個性を生かして、様々な可能性を本講座から引き出していただきたい。

〈ポイント〉

指導者は、「書くこと」に積極的に取り組むようになるきっかけを作るサポーターであるという意識で本講座に取り組みたい

1 本時のねらい

文章を書くことに慣れるとともに、要約トレーニングや読み手を意識した文章作成を通じて、文章を書く際の基本的な心得を知るとともに、ほかの人が書いた文章に触ることを通じて、多様な文章のあり方について理解する。

2 本時の構成

【映像FILE①】

- ①映像：テーマ確認・アイスブレーク [3分]
- ②映像：Lesson1 「要約する」 [5分]
- ③教室：ミニワーク「『ももたろう』を要約しよう」 [5分]

【映像FILE②】

- ④教室：要約発表 [4分]

【映像FILE③】

- ⑤映像：答え合わせと解説 [5分]
- ⑥映像：Lesson2 「読み手をイメージする」

【映像FILE③／④】

- ⑦教室：ワーク「江戸時代の人に、携帯電話を説明しよう」 [15分 ※共有・発表時間含む]

【映像FILE⑤】

- ⑧映像：答え合わせと解説 [5分]
- ⑨教室：授業のまとめ [3分]

3 授業展開

① 映像：テーマ確認・アイスブレーク

■ 映像の概要

まず「書く」の定義は、「考えていることを文字で言葉にすること」であると説明している。その上で、書くことの大切さとして、講師は「自分が本当に考えていることが外側に出てきてわかるようになる」という自分を省みる手段としての重要性を主に説明している。さらに、文字にすることに対する抵抗感があったとしても、あまり苦手意識を持たずに練習してほしいと伝えている。

■ 指導上の留意点

- 書くことの大切さ① 「自分が本当に考えていることが外側に出てきてわかるようになる」

書くことによって、自分の考えを整理したり、まとめ直したり、後で振り返ったりすることが容易となる。映像の内容も踏まえた上で、書くこと自体が自分から切り離した視点で見つめ直す（=自分を客観視する）トレーニングでもあることに触れ、自分の成長に不可欠な反省や振り返りの必要性を教えていただきたい。

● 書くことの大切さ② 「他の人のコミュニケーション手段」

もう一つ書くことの大切さとして触れておきたのが、「他の人のコミュニケーション手段」としての役割である。「話す」とは違い「書く」は内容を残すことが簡単で、多くの人に自分の考えを伝えることができる。さらに「書く」では、自分の伝えたい内容を整理したり修正したりしながらよりよい内容にまとめ上げることもできる。

これに対し「話す」では、自分の考えが整理しきれないうちに言葉として表されてしまうために、意図せずに相手を傷つけたり誤解されてしまったりすることがよくある。そのため、「書く」経験を積み重ねてその場にふさわしい表現を引き出せる力を身につけることにより、「話す」も含めたコミュニケーションが充実していくという意義を伝えいただきたい。

● 書くことの大切さ③ 「自分の考えていることが文字を通じて目に見える形で現れてくる喜びや楽しさを味わえる」

自分を振り返る手段としての「書くこと」は日記や作文で求められるが、コミュニケーション手段としての「書くこと」は試験や論文で求められる。このように、「書くこと」はこの社会において自分を確立していく上で不可欠な能力であるが、「書くこと」の持つ、自分の考えていることが文字を

通じて目に見える形で現れてくる喜びや楽しさも、映像終了後には是非伝えていただきたい。実は、書くことも図画工作や料理、手芸、陶芸、園芸などと同じ造形手段であることに気付かせた上で、自分そのものを言葉という形で表す喜びを体感できることを伝え、楽しい学びの時間がスタートしていくような雰囲気作りに努めていただきたい。

〈ポイント〉

- ・書くこと自体が自分から切り離した視点で見つめ直す（＝自分を客観視する）トレーニングであり、「書く」経験を積み重ねて適切な表現を身につけることにより「話す」も含めたコミュニケーションが充実していくということを、映像を通じて理解させる
- ・自分そのものを言葉という形で表す喜びを体感できることを指導者が補足的に伝える

②映像：Lesson 1 「要約する」

■映像の概要

講師とテキストの説明では、書くことが苦手な人は「何を書いたらいいかわからない」、「どう書いたらいいかわからない」に分かれるとなっている。「何を書いたらいいかわからない」は生きていく中で自然に解決していくが、「どう書いたらいいかわからない」には慣れが必要であるため、まずは「要約」に取り組んでみようという流れとなっている。「要約」の定義については、「大切なことを短く書き、わかりやすく伝える」といふことであると説明している。

■指導上の留意点

- 「何を書いたらいいかわからない」人の課題
「何を書いたらいいかわからない」については、

確かに日記や作文などでは「今後の人生の中で、いろいろなことを経験し、いろいろなことを考える中で」自然に浮かんでくるとも言えるだろうが、試験では背景知識や読解力がないと書くべき内容がわからないということになるので、読解や理解の重要性にも触れておく必要があるだろう。例えば社会の記述型の問題であれば、用語の説明や歴史の流れが頭に入っていないといけないだろうし、国語の記述型の問題であれば、自分の思いや経験よりも筆者の主張や登場人物の心情を読み取った上で盛り込まなくてはならない。インプットとアウトプットのバランスが学びには必要不可欠である。

●「要約」…「大切なことを短く書き、わかりやすく伝えること」

「大切なことを短く書き、わかりやすく伝えること」が求められる「要約」では、字数の制限が極めて厳しいので、多義語や婉曲表現、重複表現や強調表現、過剰な修飾語の使用は控えることによってはならない。このノートを読み取ることにより、「どうすれば要約して伝えることができるか」というすれば、手の中に届く表現ができる」という感じでいくことを伝えていた。

〈ポイント〉

- ・記述型の問題に対応していくには、背景知識や読解力も必要であることに触れる
- ・「要約」は字数の制限が厳しいので、多義語や婉曲表現、重複表現や強調表現、過剰な修飾語の使用は控えるよう指導する

③教室：ミニワーク「『ももたろう』を要約しよう」

■ワークの概要

ミニワークでは、書くことを上達させるための基礎トレーニングの一環として、なじみ深いと思われる昔話「ももたろう」を80字程度で要約してもらう。万が一「ももたろう」の話を知らない受講生がいたとしても、テキストに文章が掲載されているので問題ない。また、昔話には様々なパターンが存在するので、あくまでもテキストに掲載されている「ももたろう」の内容を要約するよう注意していただきたい。制限時間は5分である。

■指導上の留意点

●字数・時間制約について予め伝えておくことが重要

今回のミニワークでは、わざか、自分で80字程度で要約するという時間と字数の制約がある。字数の制約は、厳しくして実際取り組む上での実感してもらうに越してはならない。時間の制約の厳しさについては、予め指摘しておかないとほとんどの生徒が課題を終えられない危険性がある。

●レベル別に分けた3タイプの指導法

このことを踏まえた上で、受講生のレベルに分けて3タイプの指導法を示しておくことにする。

〈初級者向けー取り組み方を示す〉

- ① 最初の2分で課題文を読み、重要な部分に線を引かせる
- ② 次の1分で重要な部分を絞り込み、全体の構成を考えさせる
- ③ 最後の2分で絞り込んだ重要な部分を組み合わせながら要約に仕上げさせる

〈中級者向けー注意喚起する〉

- ① 特に何も指示せず始める
- ② 2分経過時点で要約の内容を考え始めるよう注意喚起する

③ 3分経過時点で要約を書き始めるよう注意喚起する

〈上級者向けー見守る〉

① 特に何も指示せずただ見守る

●課題についていけない受講生への対応

いずれの場合も、課題についていけない受講生がいた際には、重要な部分に線を引かせる作業だけは取り組ませていただきたい。5分間手つかずで終わってしまうと、何一つ達成感も得られないので、最低限要約の核となる部分の把握だけは全員に取り組ませたい。

●早めに要約を仕上げた受講生への対応

一方、早めに要約を仕上げた受講生が存在した場合は、要約の核となる部分の優先順位を考えさせたり、どうして他の内容を盛り込まなかったのかの理由を考えさせたりしておくとよい。この課題は、この講義の発展的な取り組みとしても役立つだろう。

〔優先順位の例〕

- ・ももたろうがももから生まれたこと。…1位
- ・犬、さる、きじが出てくること。…3位
- ・動物たちにきびだんごをあげたこと。…4位
- ・力を合わせておにに戦うこと。…2位
- ・宝物をもらって帰ること。…5位

〔他の内容を盛り込まなかった理由の例〕

- ・「昔、あるところに、おじいさんとおばあさんが住んでいた」
→昔話であることはわかりきっている
- 「あるところ」では何も特定できない
- 「おじいさんとおばあさん」は最初と最後にしか出てこない脇役